

北タイにおける住民による森林の自主管理支援事業

活動報告書

被助成者：特定非営利活動法人 Link・森と水と人をつなぐ会
コード番号：08-A-067

◆活動の目的

本活動の目的は、北タイの農村部にくらす人々が地域の環境保全や森林資源の管理・活用を主体的に行えるよう支援し、これを通して貧困問題の解消と、持続的な暮らしを実現することである。

タイにおける森林の大半は、近年の森林保護法の制定によって、地域住民の利用が大幅に制限されている。一方、北タイの山村住民のくらしは、かつての日本の山村のくらしがそうであったように森と共にあると言ってよく、地域住民から森を奪うこの政策は、生活の破綻をもたらすほどの深刻な貧困化を招いている。しかし政府による住民の森林利用の制限は、森林破壊を食い止めることができずにいる。これは業者や個人が貧困化した住民を利用して密伐採を繰り返すため、これによって環境が破壊され、さらに貧困化した住民が新しい密伐採に従事したり、畑地を確保しようとして森を開墾するためまた森が伐られるという悪循環が止まらない。これに対し、地域住民にとって日々の生活に欠かせない村周辺の森（：コミュニティー林）の一定の利用を認め、同時にその持続的な管理を課すという発想に基づいて提出されたのがコミュニティー林法である。しかし様々な利害が絡み合い、最初の国会提出から10年近く経つ今もまだ成立していない。森林は既にタイの国土の4分の1まで減っている。

こうした中、住民自身がコミュニティー林法の理念に基づいて森林管理グループを結成し、規則を作り、自分たちで管理を希望する範囲の森林の地図を作成して森林局にその管理の委託を申し出、事実上の黙認を得ている例がほんのわずかだがでてき始めている。こうした村では住民自身がパトロールを行なうため密伐採は起こりにくくなり、森林の再生が認められている。元来は村人たちが森と共に生きてきた自然保護の達人なのであり、森との共生において、彼らの右に出るものはいない。こうした山村で起こっていることの現実を伝え、コミュニティー林法を可決させるためにも、住民による持続的管理の事例を増やすことは極めて重要な意味を持つ。

こうしたことから、自分たちで森林管理を行い、森林局などと掛け合おうとする村は増えている。ただ多くの場合住民には、しばしば条件として課されるGPS（全地球測位システム）を使ったコミュニティー林の範囲を示す地図の作成ができないのが現状である。

Link がこれまで支援してきたファーン川源流部にあるホアファイ村は、いまやタイを代表する住民による森林管理のモデル村である。Link はこの村と協力し合い、これから新規に森林保全活動を本格化させようとする村人の活動を容易にするシステムをつくることを目的としている。特に農村住民が毎日のくらしにおいて利用するコミュニティー林の範囲を示した地図の作成

を支援することによって、森林局や国立公園局への管理・利用の申請を容易にし、住民による森林保全を実現することを通して持続的なくらしを実現する。さらにこれらが社会的認知を得ることによって、「コミュニティー林法」成立への流れをつくっていくことにある。

◆活動の内容と方法

まず、これまでモデルケースとして支援してきたホアファイ村での経験を基に、これから森林保全活動を行おうとする村人の便宜を図るため、「コミュニティー林とは何か」や、具体的な活動の紹介、技術的なマニュアルも兼ねた冊子を Link のスタッフが作成した。

次に、かねてから交流のある、北タイ・コミュニティー林運動の中心的存在である“北タイ・コミュニティー林ネットワーク”と連携して、まずはチェンマイおよび近隣県から、地図作成支援を行う村をいくつか選択、情報などを収集した。なお、地図作成活動支援の希望は多いが、活動の立ち上げには一つ一つに時間がかかるので、本年度は3～5村程度を予定した。

活動を行う村と Link 双方の便宜のために、基礎的な地域の情報をまとめる。これは村によって非常に状況（面積や人口規模、宗教・民族・文化、危険性、村人の取り組みその他）が異なるため、予め村長などに十分なインタビューを行った上で活動を始める必要がある。村人のなかには Link が来て勝手に地図を作ってくれると勘違いしている場合もあり、実際の作図には村人の同行やその他の協力が欠かせないことや、何のためにどれほどの手間や時間がどれくらいかかるかなどを十分に説明する必要がある。そのためにもこの作業は十分時間をかけて行う必要がある。

次いで村人全体を対象にした説明会、協力者に対する研修を行い、やっと GPS を使ったコミュニティー林などの測位に出かける。村の場所や住民の取り組み方などにもよるが、これまでの段階において、必要に応じて先進事例村の視察、村人による説明会なども行う。

こうして得られたデータをもとに作図を行い、この間に村の歴史などに関するワークショップも行って、村の基礎データを増やしていく。最終的には冊子にまとめて終了となる。なお、その後の改定や増刷は村人に任せる。

◆活動の実施経過

2008年8、9月にはモデルケースとしてこれまで支援してきたホアファイ村での経験を基に、これから森林保全活動を行おうとする村人の便宜を図るため、「コミュニティー林とは何か」や、具体的な活動の紹介、技術的なマニュアルも兼ねた冊子「コミュニティー林の地図作成のしおり」を作成し、内容や見やすさの検討を繰り返し行った。

10月以降は“北タイ・コミュニティー林ネットワーク”などと連携して、支援する村を選択。その情報収集を行った。12月に入って、活動対象村に想定した村のリーダーとの話し合いを進め、8村を選択した。12月23～28日にはホアファイ村中学校において、駒澤大学と共同で、フアン川流域を対象とした、日本の学生と地域の中学生たちとの交流と合わせた環境学習プログ

ラム作成について検討するなど、これまでの実績を踏まえて事業は順調に進むかに見えた。

しかしタイではこの時期、全国的な政治的対立から一部政治勢力による首都の空港占拠、政権交代など大きな事件が相次ぎ、村における社会的な活動が困難となった。12月20日にはホアファイ村と共同で、ファーン川流域の村の地図作りに関する講習会を実施したが、当初8村が参加を表明していたにもかかわらず、最終的には2村の参加にとどまった背景には、こういった政治的な現状がある。このため村での活動は数カ月間にわたって中断せざるを得なくなり、スタッフの研修や今後の準備などを行った。

2月には全国的なコミュニティー林法の成立請願行事に参加し、ファーン川流域有機農業ネットワークなどとの協力関係も強化した。3月に入ってチェンマイ県東部の茶の複合造林の様子を森林局職員の案内で視察。16日にはスタッフのビルマ研修を実施すると同時に、ファーン川流域の村で地図作成の支援活動の再開を模索し始めた。

4月以降、政治的な安定感が十分戻ったとは言えないものの、村での活動は徐々に可能になり、パンポーイ村(ファーン郡)、ホイボン村(チャイプラカン郡)でGPSを使った地図作成を始めたほか、7月にはチャイプラカン郡のノンパサーン村、ファーン郡のパンポーイ村、メーアイ郡のマイポーガム村、サンパーカーヌア村、ノンキーノックヤン村、マイローンクライ村での地図作成支援も始まった。また、ファーン川流域の3郡を出て、ピン川流域にあるチェンマイ市南方のドイロー郡にあるスィーデンムアン村でも地図作成活動への要望が出され、村長と話し合いが進むなど、村での活動が再度軌道に乗ったのは7月になった。

同時にタイ人スタッフの養成にも力を注ぎ、GPSを使った測位は日本人の同行が不要になったほか、地図の作成技術の講習も少しずつ進めている。

◆活動の成果

地域の森林を自分たちで管理することの重要性が次第に認識されつつある。しかしGPSを使った地図の作成は一般に大学などの専門家のものであり、一般の村人には無理だと考えられている点や、陸軍の作成している地形図は軍事機密であるといった誤解もごく一般的であり、これらが大きな障害になっている。プロジェクトのはじめに作成した「コミュニティー林の地図作成のしおり」は、単に地図作成のマニュアル技術書ではなく、地図の作成が決して難しいものではないこと、それほどの時間や費用なくとも住民の力で十分作成が可能であり、また、原図となる地形図もその大半が簡単に入手できるものであることなどを説明している点で、Linkのスタッフが利用するばかりでなく、今後の住民参加への一つのきっかけとして活用が期待される。

主たる目的であるファーン川流域での3～5村のモデル村の創出は、政治的影響を最も強く受け、08年の年末から何をするにも非常に困難な状況になった。スタッフの入れ替わりなど予想外のトラブルもあって、予定にあった3～5村での地図の作成完了には間に合わなかったが、7月末までに1村(ホイボン村)はなんとか終わることができた。

しかしこれらの活動が徐々に知られ、認知されるようになり、7月以降は前述のようにファー

ン川流域3郡のいずれの郡でも地図作成の協力を依頼されるようになった(この報告書を書いている9月現在では、スタッフの手が全く足りず、複数の村に待ってもらっている状況にある)。北タイの多くの村では、Linkの取り組むコミュニティー林の境界を示した地図はもちろん、宅地の地図や行政村境を示した地図すらなく、Linkはこれらの作成にも関わってきた。村では郡や県に対して村落開発計画を提出するにもどこまでが自分の村か分からないようなケースが多く、Linkの活動は高く評価されつつある。

地図に加え、村の歴史情報を住民参加のワークショップで集め、村人がまとめて地図と一緒に冊子にしておく手法が認められ、ファーン川流域以外の村からも協力の依頼が来始めていることは、Linkの活動が村の開発に必要とされていることを表している。また、これらの活動のモデル(拠点)にすべく支援してきたホアファイ村が近年、タイを代表するような環境関連の賞も含めて相次いで表彰され、バンコクからも視察が来るようになったことは大きな成果の一つといえよう。

本事業期間の終了時点(7月末)において、地図作成作業に取り組んでいる村の数と人口は以下の通り(昨年度まで支援してきたホアファイ村は人口1,104人、5月に地図作成を終了できたホイボン村は人口627人である。ともにチャイプラカン郡)。

●ファーン川流域

チャイプラカン郡……ノンパサン村(人口:332人)

ファーン郡……パンポーイ村(人口:1,681人)

メーアイ郡……ノンキーノックヤン村(人口:327人)、マイロンクライ村(人口:520人)
マイポーガム村(人口:200人)、サンパカーヌア村(人口:520人)

●ピン川流域

ドーロー郡……スィーデナムアン村(人口:505人)

この他、これらの活動を通して「北タイコミュニティー林ネットワーク」や、「ファーン川流域有機農業グループ」などの地域住民団体との交流も深めることができた。これは目的とする事業対象地域の拡大に際して有意な布石となったばかりでなく、これらの団体との協力関係は、日本との交流など、国際交流を通じた環境教育プログラムの作成などの事業にも発展している。またこれまでも、環境や開発教育、人権などの分野で日本の教育・研究機関や市民団体とタイの団体の交流の支援を行ってきたが、これらに関しても今後は一層質の高いコーディネートをしていけるようになったと考えられる。

また今後に向けて何よりも大切な成果の一つが、スタッフの育成である。年度後半にはタイ人スタッフの養成にも力を注ぎ、GPSを使った測位は日本人専門家の同行が不要になったほか、地図の作成技術の向上も著しいものがある。

◆今後の課題

ホアファイ村で数年にわたって蓄積してきた経験をもとに、他の村でも同様の活動を試み、さ

らに効率的な活動へとつなげるための模索を試みようというのが08年度の課題であったが、政治的混乱によって一時停滞した。止むを得ない面もあるが、これまでの成果である地図と村の情報をまとめた冊子などを見せることによって、政治とは無関係な活動であることが理解される場合もあり、とにかく最大の課題はこういった成果を積み重ねていくことといえよう。

最初にモデルケースとして支援したホアファイ村におけるコミュニティ林の保全活動は、タイでもっとも有名な環境活動に送られる緑の地球賞のグランプリ候補に残って現在最終選考中であり、地図を使った森林保全活動に対する支援は有効であるとの評価を得ているといえよう。しかし一般的に言えば、こういった活動はまだまだ十分な社会的な認知が得られているとはいえない。また、村によって条件が異なるのも事実であり、こういった点からも、当面は事例数を増やしていかなくてはならない。

そのために、今後さらなるスタッフの養成と、それに必要な資金の確保を図ることは最重要課題といえよう。

以上の通り報告します。

2009年9月28日

特定非営利活動法人 Link・森と水と人をつなぐ会

会 長 木 村 茂